
ノワール

そらまめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノワール

【Z-コード】

Z7323A

【作者名】

そらまめ

【あらすじ】

平和な日々に見え隠れする些細な事件。本当は危険がいっぱいだった、とはよくある話。コナンの住む米花町は特にそうだった。

爽やかな風が吹く夏の朝。博士の家の庭に干された大きなシャツと小さなシャツがバタバタと音をたてる。博士はミキサーで二人のバナナジュースを作っていた。ソファの上で洗濯物を干し終えた哀はくつろいでいた。

穏やかな雰囲気を黒い携帯のバイブレーターが壊していく。

「誰かしら？」

哀は携帯を取り画面を開く。差出人の欄には she lock home sir@...となっている。どうやらアドレス帳に登録していない人からのようだ。だが本文は『みんな公園で待つている』となっていた。

「メールかの？」

出来立てのバナナジュースをおぼんに乗せて博士がやつてきた。

「ええ。でも知らない人からみたいね...。」

哀が博士に画面を見せる。

「ん？じゃが本文は子供が書いた感じじゃな...。」

「そうね。」

「それにしても変なアドレスじゃの。she lock home sir...彼女は家に鍵をかける...？」

博士が小さな携帯の画面を睨んでいると

「これ.....ちょっと強引だけどアナグラムになってるみたいね。」

「アナグラム？並び換えると別の意味になるというやつじゃったかの...？」

「そうよ。」

「じゃあこれを並び換えると.....？」

「Sherlock Holmes...誰かさんの敬愛するシャーロック・ホームズになるわね。」

「おお！本当じゃー.....じゃあ新一君じゃな？このメールの差出

人は。」

「まあ普通に考えてそうだと思つわ。アドレス変更の報告忘れだわ。」

「全くしょ「うがない奴じや…。まあみんな公園で待つてあるようじやし行つてきなさい。今日は天氣も穏やかじやし。」

とりあえず哀は博士の作った特製バナナジュースを飲み干し阿笠邸を後にした。ガラスのコップに残つた氷がカラーンと涼しげな音をたてた。

博士は初夏の風が窓から運んでくる穏やかな雰囲気の中バナナジュースを満足げに飲んでいた。そんな雰囲気を阿笠邸の呼び鈴が壊していく。

「誰かの?」

博士はどうじいじょと口に出しながら立ち上がり玄関のドアを開けた。

「よお博士。ちょっと涼みにきたぜ。博士特製のバナナジュースでも作ってくれよ。」

ドアの向こうには公園にいるはずのロナンが呑気に立つていた。「なんじや新一。公園に哀君を誘つておいて自分は抜けがけか?」

「へ…? 灰原を公園に? 何のことだよ博士。」

「何をとぼけておる。新一がメールを送つたんじやろ?」

「……俺、今日はメールなんてまだ誰にも送つてねえぞ……?」

二人を嫌な予感が襲う。ガラスのコップの中の氷が再びカラーンと音をたてた。

×月×日

私はどうとう見つけてしまった。きっかけは米花シティホテルでの事件だ。私はその日ホテルの一室を借りて、ある男から指示された仕事をしていた。そいつはある人物の暗殺の為、組織から送り出されてホテルに乗り込んでいたのだがもう一つの指令がその男にくだされたのだ。最近組織が必死に探しているあの女が米花シティホテルに訪れるというのだ。その女の確保がその男にくだされたもう一つの指令だ。男は暗殺を終えた後その女を捕まえるとホテルの酒蔵に監禁した。

そして私のパソコンに映像が送れるよう小型カメラを設置した。

驚いたことに男が監禁した女は子供だった。

しかし私は男に言われたとおりその女の監視につとめた。

女は最初パソコンをいじつたりしていたのだが何を思ったのか立ち上がると酒を引っ張り出してきて飲み始めたのだ。

子供のやることは分からぬと思いながらパソコンの映像を見ていたのだが突然私の目に信じがたい光景が飛び込んできた。少女の体がだんだんと大人の体に近付いていくのだ。私はパソコンの前で動けないでいた。これはあの薬の副作用なのか。数秒後にはパソコンの画面の中には子供の服が破れ淫らな姿になつた大人の女が映し出されていた。

米花シティホテルでの事件は男が組織の上層部に位置するジンという大男に殺されるという悲劇的結末で幕を閉じたが女の行方は闇に消えていった。この私を除いては。

そして今日私はあの女の居場所をつき止めた。後はどうおびき出すかだ。これは私一人の単独行動になる。組織の者に見つかれば殺されてしまうだろう。だが私はこの手柄を自分一人のものにしたい。次にこの日記を書く時には私の地位はあのジン程になっている

かもしれない。それともこの辺のページで終わるのかもしれない…。

午後の空は午前中とはうつてかわっていた。雨がアスファルトを叩く音が聞こえてくる。

「博士！…とりあえず公園に行こう！灰原が危ねえ！」

「もうじやな…」

コナンと博士は傘もささずに雨の降りしきる中へ飛び出していく。

コナンと博士が公園に着いた頃には雨は小降りになっていたが園内に人影は見当たらなかつた。

「くそつ！灰原はどここいつちまつたんだ！」

コナンは肩で息をしている。

「お…おらんのか…？」

博士は膝に手をついて体全体で息をしている。

「とにかく公園の周辺を探そー…どっかで雨宿りしてるので…」

言い終わる前にコナンの眼が傘をさした大人の女に手をつながれた哀の姿が角を曲がるのを捉えた。

「博士あつちだ…！」

「えつ…！」

博士の息がまだ整わないうちにコナンは水溜まりを蹴つて走り出した。曲がり角を物凄い勢いで曲がったコナンの前方にはまだ大人の女と哀の姿があつた。

「灰原あ…！」

コナンは腹の底から思いきり叫んだ。その言葉に反応して女と哀が振り向く。そして女の顔を見たコナンから一気に力が抜けていった。

「コナン君じやない…？どうしたのよ傘もささずに…」

コナンの着ていた水色のTシャツは真っ青になっていた。

「…蘭ねえちゃん…。えつと…外で遊んでる最中に雨が降つてき

たから……。」

「遊んでたつて……一人で？」

そこへ博士が必死の表情でやつてきた。

「ふ……無事か？ 哀君……。」

「は、博士と遊んでたんだよ。」

「阿笠博士！ 博士もずぶ濡れじゃない！」

博士がいつも着ている白衣は和紙のようになつて下に着ていてシャツの色が浮き出でていた。

「う……蘭君……。こ、いやあ～ランニングの途中で降られてしまつてのお……。」

「あれ？ ラン君と遊んでたんじや……？」

「ナン」と博士は顔を見合わせる。はあ……と哀が溜め息を漏らした。

「ナン」と博士はとつあえずすぐ近くにあつたコンビニで傘を買
い哀を連れて阿笠邸に戻ることにした。

「本当に良かつたぜ。蘭が灰原を雨宿りさせてくれてよ。」

「どういう事よ……つてちょっとひつつきすぎなんじやない？」

哀が横田で「ナン」を見る。「ナン」は哀をできるだけ隠すようにして
いる。

「しゃーねーだろ？ 傘が一本しかなかつたんだからよ。説明は後だ。
早いとこ博士ん家へ戻るぞ。」

哀は落ち着かないまま阿笠邸へと歩を進めた。

「お前の役目は終わりだ…。」

サイレンサーを装着したベレッタが鈍い音を放つ。人の倒れる音が錆び付いた港の倉庫の中に響いた。全身黒一色の大男は隣りに置かれたケースを手にとると足早に倉庫の出口へ歩き出した。歩く度に男の身にまとう長いコートがなびく。倉庫の上部に着いている窓からは月の光がかすかに暗がりを照らしていた。

大男が倉庫から出るとすぐに待機していた黒いポルシェのエンジンがかかつた。

「兄貴！ やりましたかい？」

ポルシェのウインドウが開き仲間らしい男が顔をだす。

「ああ… つまらん仕事だつた。」

大男は精一杯体をかがめてポルシェに乗り込む。乗り込むと同時にポルシェのエンジンは激しく回転を始める。

「次の仕事は楽しめそうですね。」

「フツ… 人使いが荒いな。」

大男は既にタバコを吹かしている。

「ピスコの手下だつた奴が見つかつたそうでそいつを消すのが次の仕事だそうです。」

「やけに早く見つかつたな。」

「なんでも奴は組織から持ち出したパソコンを使って何か行動を起こしているそうです。」

「馬鹿な奴だ…。組織のパソコンには発信機が潜んでることも知らずに。まあピスコの手下なんざ組織の末端の末端… 知らなくて当然か…。」

黒のポルシェは流動体から高速道路に入り込んでいった。

雨は一向に止まず阿笠邸の大きな窓ガラスを叩いていた。バナナジュースの入っていたコップの中の氷はすっかり溶けている。

「これが問題のメールか…。」

コナンは哀の黒い携帯を手に取り画面を眺める。

「そうよ。メールアドレスがアナグラムになつていて並び換えるとシャーロック・ホームズになるの。」

「なるほどな…。俺がシャーロキアンだつてことをいいことにアドレスにこんな細工をしてまで灰原を公園に誘い出したつてわけか…。」

「でもなんでわざわざアナグラムなんか使う必要があつたんじゃ？普通にシャーロック・ホームズにしたつていいと思うがのう。」

「それは彼の本当のアドレスがシャーロック・ホームズだからよ。同じアドレスは使えないでしょ？犯人もびっくりしたでしょ？…シャーロック・ホームズをアドレスにしている人がいたことに。」

哀はからかうように横目でコナンを見やる。

「別にいいじゃねえかよ…。とにかく狙いが灰原つてことは黒の組織の線もありそうだな。」

「でももし犯人が奴等ならとっくに私は消されてると思つけど…？」突然哀の手の中で携帯が震えた。メールがきたようだ。博士とコナンは犯人について話していく気付いてはいない。画面を覗くとやはりメールがきていた。件名は to_sherry となっていた。

件名 : to_sherry

本文 : 25時 再び米花公園で待つ 裏切れれば仲間の命はない

これが哀の携帯に送られたメールだった。絶望的だった。犯人は黒の組織。頭の中が真っ白になっていく。やつと様々な色が戻つくる頃には哀の決心は固まっていた。

(……私の死に場所は決まつたみたいね……。)

心中で呟く。博士やコナン、それに今までかかわってきた人達を巻き添えにするわけにはいかない。

「ん? どうした? 灰原?」

「いえ……何でもないわ……。」

幸い正体がばれたのは哀だけのようだった。裏切れれば仲間の命はなし……この言葉を信じるなら哀が25時、つまり深夜一時に米花公園へ行けば全て丸くおさまるというわけだ。哀の消失を除いては。(でも本当に私以外の人には危害を加えないつもりかしら。どの道博士や工藤君も…… 考えても無駄ね……。明日には私、いないんだもね……。)

「まつ灰原の言つとおり黒の組織のやり方にしちゃ灰原だけを誘い出すつてのはおかしいよな。奴等なら関わつた人間全てを闇に葬るだろうし……。博士、警察に連絡すつか?」

「そうじゃのぉ……。」

「ダメよー黒の組織の可能性があるうちは……」

自然といつもより大きな声になつた。博士とコナンは少し驚いた様子だ。

「で、でもよお前が言い出したんだぜ? 黒の組織ならもう消されてるはずだつて……。」

「……ええそうね。でもやつぱり可能性がなくなるまでは誰にでも言つちやダメ。皆消されてしまつわ。」

「まあ哀君がそこまで言つならもう少し様子を見てもいいんじゃないか？新一君？」

「でも危険な状況には変わりないぜ？相手が黒の組織でも普通の誘拐犯でも…。様子見るつてなら俺も今日は博士ん家に泊まるぜ？」

「ダメ…。帰つて…。今日はなんだか疲れたわ…。」

「別に気にしなくても…。」

「帰つて！お願い…。」

哀は何としても気付かれずにこの家を出ていたかった。特にコナンには、「藤新一には気付かれたくなかった。

「分かつたよ。そう怒鳴るなつて…。じゃあ俺はそろそろ帰るけど博士も灰原も家から出るんじやねえぞ？ちゃんと戸締まりもするんだぞ？」

「分かつとる。任せとけ。」

「じゃあな。また明日来るからな。」

（……明日…。私は明日あなたとは会えない…。博士や他の皆にも…。さよなら……「藤君……。）

玄関のドアが閉まる。雨は尚も降り続け窓ガラスを強く叩く。哀の指先から雨粒が一粒垂れ落ちた。

時刻は午前一時前。辺りは闇につつまれていた。外では黒い雨が降つていて。月は出でていない。哀は紺色の傘を握り締めた。

（さよなら博士…。）

手を掛けた玄関のドアのノブはやけに冷たい。

阿笠邸の門を出たところで腕をつかまれた。とつたの出来事だった。組織は米花公園でなくここで待ち伏せしていた。哀はそう思つた。

「どう行くんだよ?」

「えつ……?」

腕を掴んでいたのはコナンだつた。グレイの傘をさして真剣なまなざしを哀に向けている。

「何でもないわよ……手を放して……。」

「呼び出されたんだろ? 奴等に……。」

言葉が出なかつた。何故こんなにも見透かされてしまうのだひつ。この人には嘘をつけない。

「何で……分かるのよ?」

「お前の携帯にメールが来てたの気付いてたぜ? お前はそれを見るなり俺を強引に帰らせた……こんな分かりやすい隠し事はねえよ。しかも俺や博士に隠すことばはやつぱり犯人は黒の組織つてことなんだろ?」

「コナンは特有のしたり顔を見せる。

「……そうよ。奴等は私一人で米花公園に来るようと言つたわ。裏切れば仲間の命はないともね。」

「俺も行くぜ?」

哀は一瞬ひるんだ。コナンの一言が信じられなかつた。

「何……言つてるの? 聞こえなかつたの? 私一人でいかなきや仲間の命……つまりあなたや博士が……。」

「あり得ないだろ? 奴等がお前に関わつた人間を野放しにするはずがねえよ。いづれ標的になるさ……俺や博士も。それに何か引っ掛かるんだよな。手段を選ばねえ奴等にしちゃこのやり方はおかしい。何か裏がある……そんな気がするぜ……。」

勢い良くドアが開く。ブローニングを構えたウォッカが慎重に歩を進める。

「兄貴…いませんぜ。ピスコの手下って奴は。

「だがそいつの根城には間違いないようだな。」

ジンは発信機つきのパソコンを拾いあげる。白い手袋をはめた指先で操作を始める。ピスコの手下が根城にしたのは米倉町にある古いアパートだった。大男のジンとウォッカの二人が入るだけとでも狭く感じる小さな部屋だ。

「けつ…こんなしみつたれたアパートのこの部屋で何をやつてたんでしょうねえ…。」

ウォッカは置いてあつたビールの空き缶を蹴飛ばした。ジンはパソコンの画面を睨み続けていたがふと凍えるような目で笑みを浮かべた。

「これはとんだ酒を見つけたようだな…。」

「え…？このビールがですかい？」

ジンは黙つてウォッカにパソコンを手渡した。

「メールだ…。こいつが送信したメールを見てみる。」

ウォッカは言われた通りメールの送信ボックスに目を向けた。

「…！？ to sherry…まさか！」

「ああそうだ。こいつは今日の午前一時に米花公園でシェリーに会うようだな。後二十分後ってことだな。」

「まさかピスコの手下だけでなくシェリーまで見つかるとは…。」

「今回の仕事は楽しめそうだ…。」

ポルシェのエンジンがうなつたかと思うとその黒い車体は夜の闇に消えていった。

「裏があるひでびうこうじとむ?」

「それは行つて見なきや分からないさ…裏がないにしてもメールの宛先がシェリーだもんな…俺達が黒の組織を相手にしてるのは間違いねえな。ほら…もう着くぜ。」

いつの間にか米花公園のすぐ側まできていた。辺りは夜の闇に覆われて静まり返つている。

「……新一君。聞こえとるか?ビツやら公園内には一人の男を除いては誰もおらんようじやぞ。」

突然コナンの探偵バッジから博士の息を潜めた声が漏れた。

「ちょっと…!? 博士まで着いてくるの…?」

「ああ。」

「ああ、じゃないわよ! 例え公園内に一人しかいなくとも周囲を固めている可能性も高いのよ! 博士がどこから見てるのか知らないけど早くやめさせて!」

必死に忠告する哀を見つめてコナンはほくそ笑んだ。

「…………賭わ…。」

「え……?」

「オメエがシェリーってバレてんだぜ? だつたら堂々と行こうぜ。覚悟はできる。博士も俺も…。これは賭なんだ…まだ負けたわけじゃない。」

「賭つて……どうしてそこまで……。」

「オメエはここで待つてろよ…。」

そう言つとコナンは公園内の茂みに入つていった。

「博士!俺から見てその男はどの方角にいる?」

「公園のトイレの影…一時の方角じゃ…」

コナンは時計型麻酔銃を構えゆっくりと男の元へ歩み寄る。トイレの壁が死角になりこちらからは姿が確認できない。しかし男もシェリーが来るのを待ち構えているようで、たびたび死角からその姿を見せた。それほど大男でもなく中肉中背といったところだ。コナンは麻酔銃を打ち込む一瞬のチャンスを逃さなかつた。男が倒れこみコナンが駆け寄る。

「博士！周囲の状況はどうだ！？」

「やつたな！新一君！状況からしてその男以外に仲間はないようじゃぞ！」

探偵バッジから博士の興奮しきつた声が溢れ出す。コナンはほつと一息つき胸をなで下ろす。だが黒の組織はそんなに甘くはなかつた。

「し、新一君！黒のポルシェじゃ！黒のポルシェが近付いてきとるぞ！」

「何！？」

やはり遠くから監視されていたのか。コナンはとりあえず黒服の男の上着のポケットから携帯電話を奪い茂みに姿を隠した。それと同時にポルシェの独特的のエンジン音が止まり、男が一人降りてきた。

「兄貴…一足遅かつたようですぜ…。」

ウォッカは深い眠りについた男を調べている。

「…眠つているだけか？」

「そのようですぜ。他に目だつた外傷などは見当たらぬいようだし…。」

次の瞬間には男にレベッカの銃弾が突き刺さり、ピスコの手下であった男は目覚めることのない眠りについてしまつた。

「麻酔針か…腕の立つボディーガードを見つけたようだな…シェリーハー…。」

辺りには静けさが戻つていた。

「……ためらいがねえな…。」

コナンは一応男の手首に手を添えて脈を計つた。

「惨いの……。しかしこれで奴等の手掛かりもその携帯電話だけになつてしまつたの?」

「いや……携帯には手掛かりになりそうな情報は何もなかつたよ。」

「そうか……。まあそれでも哀君が助かって何よりじゃ!」

博士はそう言つと哀の方を見ようとしたが姿が見当たらない。

「お……おい! 新一君! 哀君の姿がないぞ!」

「ちゃんといふわよ……。」

哀は淡淡とした表情で公園の入口から入つてきた。

「珍しいな……ちゃんと外で待つてるなんて。」

「待つてただけだと思う?」

「え……?」

急に哀の手がコナンの眼鏡に触れた。片方のレンズに発信機の反応が写し出された。

「仕掛けあいたわよ……彼らの車に。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7323a/>

ノワール

2010年10月10日07時14分発行